
Re：無題

神武 啓介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Re..無題

【Nコード】

N7226A

【作者名】

神武 啓介

【あらすじ】

3年前までは、いじめられっ子だった十字じゅうじそんな十字が音楽と出会い、またその中で十字が恋に落ちて、さまざまな人とさまざまな場面が十字の心を変えていくストーリーです。

プロローグ 入部前後く回想開始く（前書き）

初めて書いた小説です。

見苦しいところもありますが、ご指摘されるとありがたいです。

プロローグ 入部前後の回想開始

「もうメールしてこないで！」

あなたから毎日メール来るから私は困ってるのよ！ あんたなんか嫌い！」

またふられた。

学校で女の子にふられて家に帰り、
部屋で横たわっていた十字は、ふと一冊のノートに目があった。

その題名は『十字の日記 一年四月～二年十二月まで』

「こんなん書いたなあ」

こんな独り言を口にしながら、冒頭の部分を読んだ。下はその文章だ。

『「行くところがないんだろ！ ついてこい！」

同級生の無理やりな勧誘で吹奏楽部に入部してしまった俺。

中学の時は、しぶしぶ、潰れ掛けのバレー部に入っていた、

毎回地区予選一回戦で負けていて、俺らの代で潰れてしまった。

高校受験もとりあえず頑張って家の近い高校に入学して、
中学のころのいじめられていた自分を変えようと思った。

中学のころは、周りがどんなに彼女が居ても、

あまり気にはしなかった自分。

なぜか今は、彼女がほしい、
いや自分では、一緒にいてくれる人が欲しい気持ちの方が強いのか
な……』

そんな事を書いていた俺はもう高三だ、
吹奏楽部で打楽器パート長を任されて、引退した。

「思い出すなあ高一、高二の時、
願いが叶うなら一度だけ戻りたかった、一緒にいた時に。」

そう言ってノートを閉じ窓の外を見た。
小学生たちが「死ね。お前なんか死ね。」って言っている。十字は
悲しかった。

外はもう秋になったのに、夏のように暑く、そして眩しかった。

受験を間近に控えた高校三年生、
十字^{じゅうじ}信平^{しんぺい}の切ない思い出である。

*

*

*

四月に入学してそろそろ部活を決める頃、

「十字、部活行くとこないよな！ ついてこい！」

一階の階段付近で昇斗しょうとは十字の腕をつかんで、どこかへ連れて行く
こうとしていた。

昇斗は、小学から十字の親友で、いつも遊んでいた。

しかし、中学一年生の時、吹奏楽に興味を持ち、吹奏楽部に入部
し、

クラリネットをやっていた。

それから、昇斗と十字は時間帯の都合か、なかなか会えなかった
階段を上り、最上階の四階へ上がったところに部屋があった。

「吹奏楽部……」

十字は部屋の上にある看板を見た。

「そう、吹奏楽部！ 十字も入ろうぜ！

多分お前はセンスあると思うんだ。」

「いや、俺はいいや——」

十字の小言を無視して、昇斗は十字の腕を掴んだまま

「こんにちは！」

ドアを開け、挨拶をした。

「こんにちは昇平。あれ？ 後ろの子は誰？」

入ってきた矢先に、女の人で、先輩らしい人が、

昇斗の後ろにいる十字を見た。

十字は、目に見えない恐怖で怖くなって今にも帰りたいと思った。うちの高校は、噂では吹奏楽部は、女の人しかなくて、さらに化粧が流行っているらしく、練習もメイク道具片手にしていたらしい。

十字はその噂を聞いていたのだ。

しかし、部室の中には、なにもそういった種類の道具はなかった。

「この子は新しい入部希望者です！」

昇平は大声で叫んだ。

十字は

「あんたなに言ってるの」と言いたくなるような顔になった。

ワァーみんなの歓声が一気に部室中に響き渡った、中には男の人もいる。

「本当に入部希望者？」

女の先輩に言われるも、圧倒的な周りの気迫に負けてしまい。

「はい」

十字は答えてしまった。

まあ、噂どおりではないし、行くところないし、ここでのんびりしたほうがいいな、楽そうだし。

十字は軽く事態を飲み込んでしまい、入ることを心の中で決心してしまった。

「二人とも待ってね。すぐに部長を呼んでくるから」

そう言うのと女の先輩はどこかへ走って行った。

十分ぐらいで部長がやってきた。

部室の中で、十字のやる楽器について昇平と部長の三人で話していた。

どうやら部長は男の人らしく、頼りなさそうな感じである。

「どうするの。じゃ各パート見て回る？」

部長が言うと

「はい！」

十字は即答した、まだ楽器のことは分からないので、この際、学ぼうと思ったからである。

三人でいろいろなパートを回り、最後に低音パートを回った。

翌日の四月某日、一年の楽器決めだ、昇平はもとからクラリネットを希望していたから、クラリネットに

なった。

他の子が決まっていくな中で十字は、

「別にどこでもいいです」を

選んだばかり、人気のない、低音パートのチューバに回された。

決まった翌日、

初めて入る低音パートの練習、しかし、見学の時に、いきなりチューバの

一番低い音や、一番高い音が出たので、いきなり楽器に触れたのである。

しかし、この楽器選択こそが後々大きな事につながることは誰も予想できなかった。

プロローグ 入部前後の回想開始（後書き）

ここまで読んでいただき、有難うございます。

また、読みにくかった点など指摘していただけたら。

次回につなげていきたいです

第一話く入部早々（前書き）

やっときさ、書けました。見てくれたひとに申し訳ありませんでした。駄文ですが、よろしくお願いします。

第一話　入部早々

キンコンカンコン。。チャイムが鳴った。この高校は5時30分には定時制の生徒が入ってくるので、吹奏楽部はこの時間で部活終了なのだ。

「一緒に帰ろう」

クラリネットを片付けたらしく、昇平は話し掛ける。

「おうわかった」

十字は、ぎこちない動作でチューバを片付けた。

「十字！ちゃんと片付けた！！」

大きな声で叫ぶのは、当時低音パート長の2つ上の多田菖蒲先輩だ。ただあやめいつも厳しく、厳格な先輩だ。

「はい、片付けました。さようなら」

十字は颯爽と一階に降り家に帰った。

「ただいまー」

玄関を開け居間に入ると、母が夕ご飯を作っている。

「あら、おそかったね。どこ寄り道していたの？」

料理しながら尋ねる。

「ちよっと部活に」

「へえー部活。どこ入ったの」

「吹奏楽部。昇平に誘われてね・・・」

母は目を丸くした。

「ま、まあ好きにしたらいいよ」

それからあとは疲れていたのか、あんまり覚えてない、気がついたら、次の日の朝だった。

そんな生活が1週間がたって、高校に転校生がやって来た。

「なんでたった一週間なのに、転校生来るのさ……」

十字は同じクラスの男に話しかける。

「さあな、噂ではここに来る前半年ぐらいオーストリアに留学して、来たんだってさ」

「帰国子女か……」

十字はさつと小言で言う、話していた男の子は、不思議そうにこちらを見たが。担任が来たので、前を向きなおした。

「えー、皆さん気付いていると思うが、今日からこの学校に、転校生がやってきます。今日からが初めてなので、優しい対応をお願いします。では転校生、お願いします」

担任が言った後。後ろから、大柄な子がでてきた。

「えー、担任から紹介がありました、わたしが転校生の、不二良ふじりょうです。ここにくるまで、半年間、オーストリアで音楽と語学研修で留学していました。皆さんよろしくお願いします」

「へえーすげえなあ家金持ちかな？」

十字は横にいた、男の子に話し掛ける。

「さあな？ どうだろうな？」

男の子は、すぐに転校生の方へ視線が戻った。よっぽど気になるのだろうか。と十字は思った。

「では、したらあちらの席に座ってもらおうかな」良は担任が指示した席に座る。

「音楽かあ……」

同じクラスの十字は、この転校生が吹奏楽部に入るのかなあ、と思っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7226a/>

Re：無題

2010年12月30日02時36分発行